

●受験のために厳しくトレーニングされるのが一番心配でした

——なぜ私立校を受験させようと思われましたか。

主人の知り合いの方がお子さんを私立に入れたというのを聞いていました。たまたま、うちでも都内に転勤することになりましたから、私立の受験も選択肢の一つとして視野にいれておいたほうがいいと思っていました。ただ、その時点では、受験させるかどうかに迷いがあったので、体験談とか塾紹介の本を片っ端から読みました。家から通える範囲内で、本人に受験を意識させずに、勉強が楽しめて、その延長線上に受験があるのなら、幼児教室に通わせてもいいと思っていました。

——ずいぶん慎重でしたね。「お受験」のマイナスイメージがありましたか。

ええ。主人も私も、受験のために厳しくトレーニングされることが一番心配でした。上から抑えつけるような指導では、子供が萎縮してしまって、個性が潰されてしまうのではないかと不安もありました。また、大人の顔をうかがうような子供になってしまうのも困ります。ですから、教室選びにはずいぶん慎重になりました。

——体験授業は何教室くらい受けましたか。

二か所です。最初に体験させていただいた教室は、子供が一〇人くらいで先生がお一人、補助の先生がお一人でした。すごく張りつめた緊張感があって、一時間の間、子供は手を膝の上にきちんと乗せて私語は禁止だったんです。先生が「くしましよ」と言ったときに、「あのね」と先生に話しかけた子がいたんです。そうしたら、「ダメです。今は先生のお話をきちんと聞きましょう」と叱られてしまったんです。そのお子さんは、何か言いたかったと思うんですけど、ピシヤリと遮られてしまったんです。また、手にもった鉛筆で遊んでいたお子さんがいたんですが、「この手はダメよ」と先生が注意しました。何か、四六時中、先生が目を光らせているという雰囲気でした。うちの子は、「お休みで楽しかったことをお話してください」と先生が言われたときに、他の子といっしょになって「はい」と手をあげました。子供がしゃべった後に、すぐに先生が「それは、こういうふうにお話をしましょう」と訂正したんです。そういう授業風景を見ていて、うちの子には合わないと思いました。

——どうしてですか。

本人が一生懸命言いたいことややりたいことがあるときに、それを頭から否定するという指導法はどうかと思ったのです。いったんは「そうね」と聞いてから、「そんな時には、こういうふうにお話するともっといいわよ」とか「こういうことを付け加えると、とてもよくわかる

——よく焦らなかつたですね。

いえ、焦りました。でも先生から、「喜んで教室に来るし、やっていることもよくわかってちゃんとこなしているから、大丈夫ですよ」と言っていた良かったです。教室に行くのが嫌だとか、授業についていけないということではないので、しばらく様子を見ようとか……。

——宿題の件は、ご主人に相談しましたか。

はい。「うちの子だけ宿題をやらさないのよ、先生は様子をみたほうがいいと思うんだけど」と。ときどき主人も、「今日、どうだった？」と宿題には触れずに聞いてくれました。本人も「あれやってね、これやってね」と嬉しそうに話していました。「へえ、面白そうだね」「ああ、そうなんだ」と上手に話を引き出してくれました。「教室からお土産をもらってくるの？」と遠回しに聞いたり。本人が「ある」と言つて、宿題のプリントを出してくると、「ふうん。真つ白なんだね」と。それ以上は言いません。そして、宿題をコンスタントにこなすようになってから宿題を見せると、主人はものすごくほめるんです。「すごいな、すごいな、こんなのパパにはできないよ」と。それで、娘もやる気が出て、「パパの前で宿題をやるのかな」とか「パパと一緒にやろう」とやる気になってくれました。

● どうして、テストをしないと学校に入れないの？」

——受験するまでの間、どんな不安、苦労がありましたか。

私どもの教育方針に合う学校があるのかどうか、学校の選択にすごく迷いました。こちらの教室でいろんな学校の説明会に行ったり、受験を体験された方のお話をお聞きしたりしました。学校の評判と実際の生徒さんはどうなのか、その辺も確認しました。教室の先生から、「この学校がお子さんの性格に合っていると思います」と受験を勧めていただいたところを受験しました。ここはうちの子では無理、高嶺の花だと思っていました。

主人にその話をしたら、「とてもいい学校だと思う」と言つて、娘と一緒に学校の周辺を歩いて、どう思う？ と聞いてみたりしてくれました。学校に行つて、生徒さんの作品をみて、本人はすごく感動しました。「ママ、この学校に来るとこんなにいいものが作れるの？」「先生やお姉さんたちに教えてもらえるかもしれないわね」と言つたら、「ここに入りたい」と。

——この学校に入るためには、試験があるというのをどう教えましたか。

年長になったとき、先生から「どうして教室でお勉強しているかというとか……」と子供に話してくださいました。私からも「この学校に入るには、今やっているようなテストを受けるんだよ」と話しました。そうしたら、「どうして、テストをしないと入れないの？」と聞くんです。「お

- 学芸大附属小学校合格
- 両親の学歴―父親母親とも私立大学卒
- 両親の年齢―父親四一歳 母親四〇歳
- 父親の仕事―フリーライター
- 母親の仕事―専業主婦
- 教室に通ったのは―五歳から一年間
- 家族構成―両親と子供二人の四大家族

●受験までに一年間しかなかったことが不安でした

―昨年、上のお子さんが学芸大附属小学校入りましたが、最初からそこを狙っていたんですか？

いえ。もともと小学校受験は考えていなかったんです。小学校はできるだけ近い学校がいいという考えでした。夫は仕事の都合で長期間、家を不在にすることもあります。また、日常生活時間も不規則ですから、学校が遠いとそれだけ子供と接触できる時間が減るので、できれば近いところが良いと考えていました。

ただ、受験までに一年しかなかったことと、幼児教室に通ったことのない子でしたから、果たして間に合うかどうか、それが問題でした。そもそも夫も私も小学校受験は経験がありませんから、どうしてもというわけでもなかったのです。このため無理のない指導をしてくれる教室があれば……ということである幼児教室のお世話になりました。幼児教室に通わせようと思ったのは、もし、私が子供の勉強を家庭でみるとしたら、仕事のノリで集中してしまうので、それはまずいだらうと思ったんです。この教室以外にも、いくつかの教室の体験授業に参加したのですが、エステティックサロンの勧誘じゃないけど、脅かすようなことを言う教室もありました。今やらないと間に合わないとか、早生れのお子さんは不利ですとか、志望校は考え直

——お父さんがブラジルに行くときは「ブラジルってどっつい国？」と聞きますか？

ええ。だから、地球儀を買いました。そのために買ったわけではないですけど、前から世界のいろいろな国の話をしているときに、世界地図は平面ですから、イメージがわきにくいのです。地球は丸いと言葉では知っていても、よくわからないだろうな、と思って。

——お子さんの反応はどうでしたか？

喜んでいましたよ。「これが日本？ モンゴルにくらべたらちっちゃいね」とか。幼稚園の年中のときに、モンゴルに夫と一緒に送り込んだんですよ。毎年モンゴルに行っている人から子供でも大丈夫だと聞いていたので……。本当は、私と上の子だけで行くはずだったんです。夫と下の子はお留守番ですね。ところが、夫が下の子は小さすぎて世話ができないと言うので、だったら上の子とモンゴルに行つてよ、と（笑）。

——何月頃行つたんですか？

夏休みです。一週間。上の子は五歳になっていました。

——ご主人はよく面倒くさがりませんでしたね。

今でも言われますよ。だまされたって（笑）。帰ってきたら、「俺たち一週間も風呂に入っていない。そんなところとは思わなかった」って。シャワーくらいは浴びられるからって言ったん

ですが、モンゴルの八月は秋なんですって。とても水でシャワーを浴びられるような気候じゃなかった。それに、食べ物全然違うらしいですよ。野菜がほとんどない。上の子に、モンゴルでは何が一番おいしかったって聞いたら、ポケモンカレー。レトルトの子供用のカレーです。日本から持たせたんです。

——お子さんにはいい経験になったでしょうね。

たまには父子二人でどっかに行つて、サバイバルしてくるのも良いかなあと思って。

●周りの人がこうだから、私もこうしなければ……とは考えなかった

——受験準備のなかで、最初に考えていたことと全く違うとか、予想もしなかったことという  
ことはありましたか？

それはいいですね。周りの人がこうだから、私もこうしなければ……とはあまり考えないほうです。できることはしよう、でも、できないことはしない、と割り切っていました。週刊誌などでは「お受験」と揶揄的に取り上げられています。たしかに、一生懸命になると、どんどんエスカレートしますよね。あれも、これも、というふうに。そういうことはしたくないから、そういう雰囲気のない教室を選んだんです。ある私立も受けたんですが、面接のときに先



夜十一時とか。早くても一〇時半です。

—ご主人はお子さんの受験にはノータッチですか。

ええ(笑)。よそのご主人は、受験する一年間は残業をしないで早く帰ってくるという話も聞いていますが、うちの場合、そういうことは一切なしです。夜のつきあいをやめるということもなかったし、受験だからといって、何も変わらなかったですね。子供の勉強も見えてくれなかったし。

—もっと協力してほしいとはいわなかったんですか。

ええ。主人の場合、どうしてもということではなかったので。やはり私の意思が強く働いていましたから。

—あなたがイライラしているとき、ご主人はどうでしたか。

当たらずさわらず(笑)。でも、夏期講習のときに子供を迎えに行ってくれたことはあります。一緒に試験会場に行ってくれたことは、一回くらいあったかな。

—学校説明会には行ってくれましたか。

土日であれば行ってくれました。

—会社を休んでまで協力するということはなかったのですか。

面接のときだけです。

—ご主人は白紙の状態で模擬面接をうけたのですか。

いや、そんなことはないですよ。何を聞かれて、どう答えたらいいか、それは練習しました。志望動機や教育方針など、基本的なことは必ず質問されると思います、前の週の休みの日に、ちょっと話し合いました。私が学校の説明会に行ったときは、パンフレットを見せて、こういうことだからとよく話はしておきました。志望校を決めるときは、むろん主人と話し合いました。

—模擬面接はどうでしたか。

緊張はしたようですが、立ち往生するようなことはなかったですね。会社では、自分が面接する立場でしたから、けっこう落ち着いていました。模擬面接を受けたのは一回だけです。

—受験したのは何校ですか。

二校です。

●よそのご主人は、そんなに手伝ってくれるんですか？

—ほかに苦労したことは？

夏休み前までは週一回の授業でしたから、本格的な勉強はしていなかったんです。だから子

— 学校選びのキーワードは「伸び伸び」ですか。  
そうです。

● 一時期、子供にチック症状が出ました

— 小林さんがお子さんの受験に本腰を入れたのは、実質一年間ですか。  
ええ。厳密にいえば、七、八か月間ですね。

— 小林さんご自身の生活は何か変わりましたか、残業はしないようにしたとか。

いや、何も変わってはいません。残業はもともとしないので……。

— なぜですか。

残業するのは、仕事のスピードが遅いか、会社が必要以上に仕事を与えているかどっちかですよね。いずれにしても正常な状態ではないと思っていますから。

— 仕事が終わっても、職場に居残ってる人がいますね。また、一生懸命仕事してるんだけど、帰りはいつも遅い人もいますが……。

そういう生き方はしたくないというのが僕の主義ですから。

— 夜の付き合いは？

五時半に仕事が終われば、ぱっと帰ります。同僚と酒を飲みに行くことはほとんどありません。仕事で飲むときは別ですが。早く帰れるときは帰ろうと思っています。土日はきっちり休みます。月に一度か二度は出張絡みで土日が潰れますが……。

— 家に帰るのは何時頃ですか。

だいたい六時半〜七時ですね。この時間に帰れば子供と一緒に食事ができます。

— お子さんと一緒に食事するのは楽しいですか。

そうですね。努めてそうしようと思っています。一緒にテレビを見たり、本を読んだり、ゲームをしたり、そういう時間がちよつとでもあつたほうが自分も楽しいですから。

— 受験のためですか。

いえ。そんな気持ちはまったくありません。楽しいから、一緒に遊ぶし、旅行にも行くという事です。

— どこに行きましたか。

沖繩やグアムに行きました。年齢的にもそういうことが楽しめるし、記憶に残りますから。

— 受験する年の夏にも旅行に行つたんですか。

ええ、夏休みに沖繩に行きました。1週間くらいです。

——三〇五歳頃はどんな家庭環境でしたか。

河井（父） 男兄弟三人で、僕は長男です。家の近くに児童会館があつて、学校が終わるとすぐそこに行つて遊んでいました。その先生たちが親代わりでした。父親は公務員です。帰りが遅くなることはほとんどなく、子供と一緒に夕食をとることが多かったですね。

——お父さんから勉強しろと言われなかったですか。

河井（父） ええ。勉強はしなくてもいいけど、しておいたほうがためになるぞと。その程度です。いい成績をとつてもそんなにほめてもらえなかったですね。ただ、厳しいところもありました。小学校の四年生か五年生のとき、父親に塾に行きたいって言つたんですよ。中学受験のために、友達がみんな塾に行つていました。当時、クラスの六割は塾に通つていました。だから、僕も行ったほうがいいかなと。でも、塾に行つても、お前はそんなに勉強しないだろう。友達が行つているから行きたいだけじゃないのか。ちゃんと勉強して、わからないところが出て、誰かに教わりたいたいという気持ちになるまではだめだと。

——で、どうしましたか。

河井（父） 結局、塾には行かなかつた（笑）。

——進学はどうしましたか。

河井（父） 中学はどこも受験せず、区立の中学校に進みました。高校の時は、国立の高専を見学に行つたんですが、さすが国の施設と言わんばかりの、すごいコンピュータールームがありました。それを見て、もうこの学校しかない（笑）。中学校三年生のときに、コンピュータの世界で生きていこうと決めました。

——親に相談しましたか。

河井（父） 「おう、そうか」って（笑）。

●好奇心がエンジンになって才能を引っ張るんだと思います

——わが子はどんな育て方をしようと思ひましたか。

河井（父） 僕は児童会館で小さい頃からいろいろな経験ができましたから、子供にもいろいろな経験をさせてあげたいと思ひています。児童会館には、子供の好奇心をそそるような物がいっぱいおいてあるわけですよ。勝手にやつていいよと。そうすると、次はあれやってみよう、今度はあれを……という感じで好奇心が尽きることがなかつたですね。僕の経験からいつても、子供というのは、好奇心がエンジンになって才能を引っ張るものだと思います。だから、家でも、危ないことは避けますが、他人に迷惑がかけられない範囲だったら、どんどんやらせてあげ

河井（母） 三歳ずつです。

——いいですね、お子さんが三人もいて……。

河井（父） 僕自身、兄弟が多くて楽しかったのです。三人目ができたときはすごくうれしかったですね。今は一番下の子がかわくでしょうがないですね。

——なぜ私立を受験させようと思ったのですか。

河井（母） 私は高校まで公立で大学は私立なんです。小学校から上がってきた友人というのが、ちよつと違うんですね。精神的なゆとりというか、心にゆとりがあるんです。幼児期から丁寧な教育を受けてきたことと、人生で一番多感な時期に好きなことがやれたという人は、やはり生き方に幅があるように感じられたんです。高校まで公立で過ごしてきた私の場合、高校の時にしろ、大学の時にしろ受験のためにやりたいことをとことんやり続けたり、何をしたいのかをさがすこともできなかったのですから。

また、子供の時の友情がこれほど絆の深いものかというのも実感しました。彼女達の友情関係は人生の財産というか、本当に羨ましいものでした。公立の噂をいろいろと聞いていて心配だったということも拍車をかけたのかもしれないですが、可能性があるなら希望する私立小学校に行かせたいと思うようになりました。ただ、幼稚園の年少の頃は、全然考えていなかったん

です。年中の夏くらいに、やってみようかなって気持ちになりました。娘は、クイズをしたり、迷路をたどってみたりすることが好きで、受験向きかなと思ったのも理由の一つです。

——志望校は決めていましたか。

河井（母） ええ。ただ、この学校に受からなければ近くの公立にいかせるつもりでした。

——ご主人には相談しましたか。

河井（母） はい。でも、最初はふうーんって感じでした。

——ピンとこなかったんですか。

河井（父） ええ。僕もずつと公立ですが、公立でもいい先生がいるんです。僕が理科を好きになったのは、先生がすごくおもしろかったからです。実験のときに、酸性とアルカリ性を合わせる中性になるという実験をしていたんです。リトマス試験紙を入れて確かめるんですが、できたと言ったら先生がぺろつと舐めて「おっ、いいんじゃないか」っていうから、マネをしてなめたら、先生が「すぐ、口をすすげ！」って。先生は人指し指をつけて中指を舐めていた（笑）。公立でもそういう先生がいるんだから、無理に私立を受験させなくてもいいんじゃないかと言ったんですが、よく考えると、私立のほうがいい先生に会えるチャンスも多いかなって。



たが、主人にとってはけつこうむずかしい注文だったようです。厳しくしてみたり、甘くなつてしまつたり、何かものをねだられると、つい買つて与えてしまつたりとか……。

——お休みはどのように過ごしましたか。

私は土日につきちりと休めるのですが、主人はそうではないときがあつて、三人揃つてどこかに遊びに行くことはあまりできませんでした。試験の少し前、絵画の先生に、三人でどこか出かけたときの絵を描いてくださいと言われたときに、娘は描けなかつたのです。このときは、私が注意されました。教室に通つたのは、週一回、二時間半預けていました。ほとんど私が送り迎えました。夏期講習は、七月と八月に一週間ずつ毎日行きましたが、このときは、ちょうど主人が休みがとれましたので彼が送り迎えしてくれました。私も集中的に休んだりして時間のやりくりをしました。

●初めてのお泊まりのときは、夜一二時まで電話の前にはいました

——大変だったようですね。

もっと早くから始めれば、本人に負担をかけないですんだと思いますけれど……。それといろいろと反省点があります。例えば、工作にもっと時間をかけてあげれば良かったと思うし、

絵本をもつと読んであげたり、季節の花や行事についてももっと関心を持たせてあげたかったですね。ただ幼児教室では、毎月、箱根合宿に行くのでそういった点はいくらかはカバーできたと思います。娘も楽しかったようで、箱根の合宿教育には毎月行きました。お友達とお泊まりをするのも初めての体験でした。

——今までに、お父さんお母さんなしで、よその家に泊まったことはありませんか。

まったくありません。初めて合宿に参加したときは、「合宿があるんだけど、みんなとお泊まりしてくる？」って聞いたなら、「うん」と言ったのですが、当日、駅で嫌だと言いました。担任の先生に相談したら、「じゃあ、先生と一緒に行きましょうね」と言ってくださつて、たぶん、先生がずつとついていてくださったと思います。後で写真を見せてもらいましたら、娘は本当に楽しそうで、嫌がつている感じはまったくありませんでした。

——駅で嫌がったときに、合宿をやめさせようは思いませんでしたか。

ええ。ちよつと可哀想かなとも思つたのですが、同じ誕生日くらいのお子さんもいたのです。その子のお母様が、「うちの子も最初は泣いたけど、帰ってくるときはケロッとして、また行きたいって言つてたから、大丈夫よ」とおっしゃつてくれました。ここでやめてしまうと後で後悔するかなと思つて送り出しました。

についても、公立に比べるとずいぶん充実していると思います。その辺を考えて、上二人の男の子は中学は私立を受けさせようと思っています。

●何が間違っていて、何が正しいのかを教えるのは親の義務とっています

—お母さんが同居しているんですか。

いえ、核家族です。

—上二人の男の子は無茶はしませんか。壁にいたずら書きをするとか……。

一切ないです。たぶん、私がすごく厳しい母親だったためと思います。

—どう厳しいんですか。

小さい頃から、人に迷惑をかけてはいけない、約束ごとを破ってはいけないと言いつけて来ました。年子だったので、上の子は一歳半ですぐお兄ちゃんです。この子には、自分より小さい子には、何があっても手を出してはいけないと言いつけてきました。だから、上の子は、弱いものいじめはしません。やさしい、割とおっとりした子になりました。二番目の子は逆に活発なタイプですから、弟が先に手を出しても、兄はやり返そうとはしません。やり返すなど言いつけてきたからです。その代わり、私が弟を叱ります。今、お兄ちゃんが何もしてないの

にぶつたでしょ。「どの手がいけないのかな」と、その手をパンと叩きます。

—ほめて育てるといふ意見もありますが、どう思いますか。

親は子供に対して、何が間違っていて、何が正しいのかを——結果的に、親が押しつけることになってしまいかもしれないけれど——教える義務があると思っていますから、叱るときはきちんと叱ります。叱った後は、あなたが好きだから叱るのよ、と必ずフォローをしています。子供たち三人が一番わかってほしいのは、何があっても、親はあなたたちが生まれてきたことを心から喜んでいる。あなたが素敵な思い出を持ちながら、成長してくれることを願っているという気持ちです。これだけは、子供にわかってもらいたいと思っています。自分たちが親に望まれて生まれてきて、愛情を受けて育っているということがわかっていれば、素直に成長してくれると思っています。

●私は手のかからない子供だったようです

—あなたご自身、幼児期の家庭環境はどうでしたか。

両親と祖父母、それに兄と弟の七人家族です。父親は建設関係の自営業でした。両親が忙しいこともあって、あまり厳しいということはなかったですね。母は、祖父母の食事の世話と家